
映画青年銀二ノ二丁目劇場

KUWA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

映画青年銀二ノ二丁目劇場

【Zコード】

Z3980D

【作者名】

KUWA

【あらすじ】

脚本家になる為、人生経験を積みに、新宿二丁目に潜入した青年を待っていたのは・・・

第一幕 「一丁目」

・ 夏が過ぎ、色とりどりの枯葉が路上を覆う夜の街角に青年は立っていた。

待ち合わせの場所は古びた映画館の前

扉は閉められ、中には新聞やチラシが散乱していた。

時刻は23時をまわり、会社帰りのサラリーマンの姿も見えなくなつてきていた。

目の前を通るタンクトップ姿の男達の視線が痛いほど伝わってくる。
そう、ここは新宿一丁目。

青年は脚本家を目指していた。

だが青年には脚本家としてもつとも必要なものが欠けていた。
「人生経験」である。

脚本家とは人間を見る觀察力、それを脚本に生かせる経験が必要である。

と、師匠である某映画監督が言つたのを覚えている。

そこで某映画監督は出来の悪いこの弟子に経験を積ませるため
新宿一丁目という街で働けと、そそのかしたのだ。
なんて悪い師匠だろうか。

従順な青年はそれを真に受け、さっそく一丁目に出かけた。
にぎやかな大通りから横道に入ると、街の雰囲気が一辺した。

平日の昼間、大きなビルの裏で並んでいる若い5・6人の男達。
何かを待つてるかのように腕を組んだり、前を通る男達に視線を送

つたり。

青年も興味本位で男達と同じスタイルで並んでみた。

「いくらかな？5千でどう？」

しばらくすると上下青スーツの初老の男性が声をかけてきた。

「え？ 5千？ 何ですか？」

「ほら、行こうよ。早く。ね。」

青スーツが青年の優しく手をひく。

「ちょ、ちょっと、何ですか！」

青年は身の危険を感じ足早に路地に逃げ込んだ。

『美少年の館』『BOYS LOVE』『桃太郎』
見たこともない看板が目に飛び込んでくる。

何故だか異様な興奮を覚え、胸が高鳴るのが分かつた。

映画『クルージング』でゲイタウンのクリストファー通りに
おとり捜査で潜入したアル・パチーノもこんな気持ちだったのだろうか。

青年はこの街で働くかなくてはならないのだ。

「日給2万円 体育会系募集」「時給1000円 バーテン募集」
本当にバー・テインだけか？ 怪しい。怪しそう。
だが青年は素通りするフリをしながら何度も往復し
店の番号をメモ帳に控えた。

新宿高島屋のロータリーのベンチに腰ををかけ
携帯電話を握り締めてから2時間が経過していた。

日給2万か・・・いや、そういう問題じゃない。道を踏み外してしまつ。

写真撮影5万はどうだ？ダメだ。リスクがでかすぎる。

もし大物になつた時にWinnyで流出したらどうする？
やっぱり自分には出来ない・・・青年は大いに悩んでいた。
そもそも新宿で一人暮らしを始めたのもあの映画監督の一言からだ
った。

「経験不足」

見上げた夕日に師匠のにやけ面が重なつた。

所詮、お前は埼玉の芋だ。何もできやしないのさ！

「負けてたまるか！俺は脚本家になるんだ！」丁目が何だ！

青年はこぶしを握り、携帯のボタンを押した。

「やあ、待つた？チヨッパーズ代表の美篠一巳です。ヨロシク。」暗がりから現れたのは黒い毛皮のコートに身をつつみオールバックの30代後半の男。

白のカラー・コンタクトのせいかまるでドラキュラ伯爵のよつな面持ちだった。

「いや、いま来たところです。」

着慣れないスースと棚の奥からひっぱりだしてきた

汚い革靴を履いた青年は緊張していた。

そう、青年はホストクラブで働く道を選んだのだ。

ホストクラブとは男性が女性を相手に

楽しい会話とお酒でもてなすところじゃないのか？

しかし、ここは新宿一丁目。

本当にただのホストクラブなど存在するのだろうか？

青年はこれから起きたドラマを知る由も無かった・・・。

第一幕「地下室」につづく

第一幕 「地下室」

埼玉の片田舎で青春時代を過ごした青年は悶々とした日々を過ごしていた。

潰れかけのスーパーでのアルバイト。あぶく銭を賭けて友人と徹夜で麻雀。

何の出会いも刺激もない。あるのはむせかえる栗の花の臭い。毎日が同じ繰り返しだった。

だが、気まぐれで入った映画学校でのある映画監督との出会いで俺の人生は変わった。

俺は脚本家を目指す。

この腐りきった日本映画界を変えてやる。

親に頭を下げて学費を出してもらい、さあ輝く未来へ出発だ！順風満帆の明るい人生が待っているはずだ！

甘かった。

ゴジラとドラえもんの映画しかみていらない青年が生き残れる世界ではない。

悔しいが監督の言つ通りだ。

すべてにおいて経験が足りない。これが現実だ。経験を積まなくては・・・。

母さん、いま息子は一丁目を歩いています。

「まだ源氏名無かつたよね？考えてきた？」

「いえ、源氏名つて何でしょうか？」

「さすがに本名で働くわけにはいかないでしょー夜の世界で。

じゃあ、俺が付けてあげるよ。うーん、何がいいかなあ。」

このドラキュラと薄暗い路地へ入るたびにドキリとする。

この男もあつち系なのだろうか、もしかしてこの街では俺だけノーマルなのだろうか。

すれ違う男達の視線が痛い。しかし胸は高鳴る。

「銀一、葵銀一ってのはどう? 黄門様の葵の紋所に君がつちつして
るから

銀一 なんて男らしくていいじゃない?」

「はは、黄門様ですか、黄門・・・ハハハ。」

母さん、今日から息子は銀一になりました。

二丁目のメインストリートへ出た。

歌舞伎町とはまた違つた淡いネオンの灯りが行き交う男達を照らして
いた。

「君、あつち系? いや、それならそれでいいんだけどさ。」

「いや、僕はノーマルですよ!」

「偏見とかは無い?」

「無い・・・です。」

無いと言つたら嘘かもしね。

ただこの街で働くためには慣れておかないといけないだろう。

しかし男達が路上で熱く抱き合い、ディープなキスをしている
この異様な光景に埼玉から来た青年銀一は溶け込めるのだろうか。
いやいや、溶け込んではいけない。

ギリギリの境界線を渡つていかなければならぬのだ。

一步間違えたら・・・考えただけでも恐ろしい。

この胸の高鳴りはそういう意味ではないはずだ!

「さあ、着いたよ。よつこそチヨツパーズへ！」

着いたのは使い古された雑居ビルの入り口

——壁に何もない。どういうのだ？

すると、ドランカラは軽快に地下階段へと降りて行った。

地下室！・・・一度入った逃げられぬ地下室！

映画『完全なる飼育』では誘拐されてきた女性

飼育されていったが、ここでは男が飼育されるのか！？そして最後はこのドラキコラ好みの男にされて・・・

地下室の奥から一昔前に流行ったヨーロビートが聞こえてくる
そのビートに合わせて胸の高鳴りも最高潮だ！

さあ、どうする銀一。

お前はその程度の男さ、一歩踏み出す勇気も無い。
さつさと荷物まとめて埼玉へ帰つて芋でも掘つてな

ビリからともなく師匠の声が。

。ひざへひせ

芋でもカマでも掘るのコメンだ！

たぶん。
俺は映画界を変える男なんだ。

勢い良く階段を駆け下り

青年銀一は白く冷たい扉を開けた。

第三幕「金髪」に続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3980d/>

映画青年銀二ノ二丁目劇場

2010年10月29日05時49分発行